畜産業で働く！ Work Style VOL.03

豚肉をつくる

命の大切さを毎日実感！ 養豚は素晴らしい仕事です

チームワークを大事に 母豚の助産に全力で挑む

豚肉を生産する養豚業は、大きく分けて、人工授精・分娩と、肥育の2つに区別できる。三沢市に本社がある株式会社川賢で、養豚業の基礎ともいえる人工授精・分娩部門で、助産を主な仕事としているのが、入社5年目の織川恵美さんと11年目の野田頭星吾さんだ。

川村高明社長は「養豚業で最も重要なのは、豚舎に病気を持ち込まないこと。2人は、助産をはじめとするさまざまな作業において、チームワークを重視し、健康な子豚を肥育に渡すため、とても頑張ってくれています」と話す。

豚肉の生産サイクルは、人工授精してから約114日の妊娠期間を経て出産。約20日間の哺乳後、約165日間肥育され、肉豚として出荷される。

「母豚の出産は自然分娩で3時間、難産だと倍以上の時間がかかる。1度の分娩で、だいたい15頭の子豚が5分単位で生まれてきます。出産時間が長くなると窒息してしまう子豚もいるので、10分で出て来なかったら助産するんです。助けることができたときは、子豚が生きてて本当によかったと思います」と織川さん。

野田頭さんは、助産に加え、よりよい母豚を生産するため、どれとどれの掛け合わせがいいか一頭一頭細かくチェックし、タッグ(耳標)を打つという作業も丁寧に行っている。

就職の決め手は 動物が好きという思い！

2人がこの仕事に就いたのは、共通点でもある「動物が好き」というシンプルな思い。

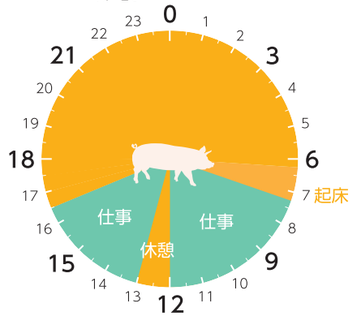
織川さんは犬と猫を飼っていて「祖父が牛の繁殖農家だったので、同じ畜産の道を選べば喜んでくれるかなぁと思って」とにっこり。

野田頭さんの家では、現在もラブラドールレトリバーなどの犬2匹とキジを10羽飼っていて、毎日犬の散歩も欠かさない。キツイ仕事と思われがちな仕事だが「可愛い動物と毎日ふれあえるのは楽しいし、仕事に見合った収入も、長く働ける理由だと思う」と素直な気持ちを明かしてくれた。

育成豚の発情を確認

優しく母豚・子豚を飼育する、織川恵美さんのある1日のお仕事

- 7:00 起床。
- 7:15 ～ 8:00 自宅から農場へ。シャワー後、つなぎに着替えて仕事開始。
- 8:00 ～ 9:00 母豚、子豚への給餌。異常豚の見回り。
- 9:00 ～12:00 分娩や去勢など。(曜日で異なる)
- 12:00 ～13:00 休憩。
- 13:00 ～16:30 午前中の続きの作業、片付け・作業報告書の作成など。
- 16:30 帰宅。



生まれたばかりの可愛い子豚

生まれたての子豚が冷えないように専用の粉をまぶして乾燥

子豚へワクチン接種する織川さん

たくさんの子豚が 元気に生まれるよう頑張る

「ほぼ毎日行う助産のほかにも、仕事はいろいろあるんですよ。生まれたての子豚は濡れているから乾かしてあげたり、美味しい肉にするため生後まもなく去勢したり。生まれてきた子豚を20日間ケアするんだけど、子豚は豚舎の温度が暑くても寒くても下痢をしてしまうデリケートな動物。豚舎の適正な温度を保つため、細心の注意を払います」と2人。

養豚の魅力を「普段みんなが食べているものが、どうやって生産されているか理解できたことは嬉しい。私たちは命をいただいて生きている。命の大切さに気づかされたことが一番かなぁ」と織川さん。

野田頭さんは「母豚の顔って、鼻が短かったり長かったり、同じように見えても微妙に違う。初産の豚から何度も生んだ母豚まで、自分が触っても嫌がらないんです。ほんとに可愛いですよ」と少し照れた様子で語った。

現在、2人は後輩の指導も行っており「助産では豚のおなかの中が見えないから教えるのは大変だけど、自分たちが経験したすべてのことを伝えたい」と意欲的。

「そして、とにかく一頭でも多く健康な豚が生まれるよう技術を高めていきたい」と目標を語ってくれた。

Profile

高野沢農場

織川 恵美（おりかわ えみ） さん

青森県十和田市生まれ、23歳。青森県立三本木農業高等高校を卒業と同時に株式会社川賢へ。現在5年目。十和田市と七戸町のサッカーチームに所属。十和田市に家族6人で住む。

谷地頭農場

野田頭 星吾（のだがしら せいご） さん

青森県東北町生まれの29歳。八戸学院野辺地西高等学校を卒業後、株式会社川賢へ。現在、入社11年目。趣味はドライブ。東北町在住。

企業名 株式会社　川賢

- 所在地／青森県三沢市
- 事業内容／養豚の繁殖から肥育まで一貫経営を行う。このほか飼料販売、養鶏農場も経営。

川賢インジーンファーム（高野沢農場、谷地頭農場）

- 従業員数／ 36人（技術研究生として、ベトナム人9人）
- 年間出荷頭数／ 54,000頭（母豚2,000頭を飼育）